

令和7年度 研究概要

1. 研究全体構想

学校教育目標

未来を開拓し、主体的に行動する、心豊かな子供の育成

目指す子供の姿

<知> 自ら問題意識をもって考え、共に学び合う子

<徳> 一人一人を大切にし、相手を認めることができる、思いやりのある子

<体> 運動に親しみ、体を鍛える子

研究主題

『主体的に学び続ける子供の育成』

生活科 ～自ら思いや願いをもち、意欲的に学習できる授業づくり～

理科 ～自ら問いをもち、試行錯誤しながら探究できる授業づくり～

2 研究主題設定の理由

(1) 時代の要請から

令和2年度から全面実施された学習指導要領では「資質・能力」の育成において「①知識及び技能」「②思考力、判断力、表現力等」「③学びに向かう力、人間性等」が三つの柱として明確化された。

小学校生活科では、「①活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。」「②身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。」「③身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」のように捉えることができる。

小学校理科では、「①自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。」「②観察、実験などを行い、問題解決の力を養う。」「③自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。」となっている。

本校の研究主題は、この中の三つ目の柱に主眼を置き、子供の資質・能力を高めていくことをねらったものである。

さらに、「どのように学ぶか」について、「主体的・対話的で深い学び」の視点から学習過程の改善が示されている。

(2) 学校教育目標から

本校の教育目標は「未来を開拓し、主体的に行動する心豊かな子供の育成」である。さらに、目指す子供像に「自ら問題意識をもって考え、共に学び合う子（知）一人一人を大切にし、相手を認めることができる、思いやりのある子（徳）、運動に親しみ、体を鍛える子（体）」を掲げ、「知・徳・体」と調和のとれた人間性豊かな子供の育成を目指している。特に「自ら考え学び合

う子」は、自ら問題を持ち、主体的な学びを通して育つものと考えている。生活科・理科の研究を通して明らかになったことを、他教科領域にも広げるようにし、学校教育目標の具現化につなげる。

（３）子供の実態から

近隣には市総合教育センター、市立高校、中学校、こども園、図書館、コミュニティセンターといった施設があり、学校内には多種多様な樹木や池、畑など豊かな自然が整えられている。恵まれた環境の中で、児童は様々なことに興味をもち、学習や運動に取り組んでいる。また、好奇心旺盛で、小さなことにも感動したり、素直に自分の思いや考えを表現したりするなど、元気で活発である。このような児童のよさを生かし、興味や好奇心が問題意識に高まるまで根強く取り組む力を育み、学び方を身に付けさせることで、可能性が広がる児童である。

本校では、今までの継続研究から理科や生活科を楽しんでいる子供は９割ほどいる。また、友達や教員などの人との対話や、事物現象との対話から予想を考えたりその根拠を説明したりすることができるようになってきている。一方で、不思議に思ったり疑問を見出したりすることに楽しさを感じている児童は４割程度である。自ら問題意識をもって学習に臨めていない児童も少なくない。また、学習したことを他の学習や日常生活に生かそうとする姿勢、学んだことから新たな疑問を見出す姿勢はあまり育っていない。

これらを踏まえ、問いを自分事としてとらえて、主体的に学習に臨めるようにしたい。また、学習したことを自ら生かして新たな学びを生み出す姿勢を育てていきたい。

３ 主題についての基本的な考え方

（１）「主体的」とは

平成２９年度告示の小学校学習指導要領では、主体的な学びについて以下のように解説している。

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる視点

生活科では、①自分の思いや願いをもつこと、②諸感覚を通じた活動の中で楽しさや充実感、満足感などの手応えを得て自信や意欲をもつこと、③学んだことを次の活動や生活に生かそうとしたり、新たなことに挑戦したりすること、を「主体的」ととらえる。

理科では、①わからないことに自分から関わること、②「知りたい！」「どうなっているのだろうか？」と疑問や問題を見出したとき、自分から予想したり解決の方法を考えたりするなど見通しをもって学ぶこと、③学習活動をふりかかって自分が何をわかった、できたかを理解し、学んだことから新たな問題を見出したり、生活に生かそうとしたりすること、を「主体的」ととらえる。

実験や観察などの活動には意欲的であるが、その活動の見通しや目的を自ら見出していなかったり、思ったようにならなかったときにすぐに答えを教員に求めてしまったりする姿は「主体的」とはいえない。

（２）「学び続ける」とは

児童は知的好奇心をもって対象と接したとき、そこに不思議さや疑問を感じる。その不思議さや疑問を問題として整理し、解決の見通しを立て、作ったり、試したり、観察したりしながらきまりを見出していくことを「学び」と捉える。そして、それを持続させるためには、「そうか、そうだったのか」という感動を伴った理解、実感が必要であると考え。そして、その理解や実感したという事実を自分自身が気付いたり、児童同士で共有したりすることで、自ら学びを継続していく姿勢が身に付くと考え。

（３）「意欲的」とは

生活科では、自然を使った遊びや身近な場所の探検などの児童にとって魅力的な活動を行う中で、「楽しかった」だけで終わらないことが大切である。何かできないことや思ったようにならないことがあった時、「どうにかしてできるようになりたい」という思いをもち、経験や対話をヒントに取り組む姿や、遊びや活動のあとに「もっとやってみたい」「ここを変えたらどうなるんだろう」と遊びや活動の幅を広げようとする姿を「意欲的」と捉える。

（４）「試行錯誤」とは

理科では、不思議な事象と出会った時に問いをもち、「なんとかしたい」「解決したい」と思い、実際に実験や観察を自分たちで考えて解決をしていく過程が大切である。実験や観察の結

果を他の人や班と比較したり対話したりして考察することや、一つの方法で解決したら別の方法を考えること、得た知識を他の場面に適用することなどを「試行錯誤」と捉える。

4 研究計画

年ごとに問題解決の過程のどこに焦点を当てるかを定め、3年間で「主体的に学び続ける子」の実現を目指す。今年度は、問題解決の過程の事物・事象に向き合う部分に焦点をあてて研究を進めていく。

生活科

年度	研究形態	学習活動の過程
令和6年度	校内授業研究	・事物・現象に出会う。 ・事物・現象に興味・関心をもつ。
令和7年度 (本年度)	3校合同研究	・事物・現象と向き合う。
令和8年度	公開研究会	・他者と伝え合う。 ・学習したことを振り返り、生活や他の場面に生かす。 ・新たな興味・関心をもつ。

理科

年度	研究形態	問題解決の過程
令和6年度	校内授業研究	・事物・現象に関心をもつ。 ・問題を見出す。
令和7年度 (本年度)	3校合同研究	・根拠のある予想を立てる。 ・実験方法を考え、実験を行う。
令和8年度	公開研究会	・結果を分析する(考察する)。 ・学習したことを振り返り、新たな問題を見出す。

5 研究仮説

生活科

自分の思いや願いをもち、試行錯誤したり伝えあったりする場を充実させることで、意欲的に活動することができるだろう。

理科

根拠のある予想・仮説をもとに自ら実験方法を考え検討する場をつくることで、主体的に問題解決の過程を進めることができるだろう。

6 手立て

(1) 見通しをもつためのワークシート、ノートづくり

ワークシートやノートの型を統一することで、このあとすべき過程がなにかを児童が理解できるようにする。特に理科では、ノートづくりを通して問題解決までの過程や思考の整理が行われるようにする。

(2) 試行錯誤、何度も挑戦できる場づくり

生活科では、諸感覚を生かした活動に加え、教材の種類や置き方の工夫、教室の配置の工夫などを行い、児童が自分のやりたいことを何度も試せたり、振り返って改善出来たりするような場づくりを検討する。

理科では、実験道具や実験場所を十分に確保し、児童自らが安全に留意しながら実験に取り組めるようにする。また、実験の内容に合わせて学習形態を変え、一人一人が役割をもって実験を行えるようにする。

(3) 他者と考えを共有する場の工夫

生活科では、同じ課題に取り組んでいる児童をグループとして、お互いの進捗や困り感を伝えやすくすることや、異なる課題に取り組んでいる児童をグループとして、新しい考え方を取

り入れられるようにするなど、意図のあるグループで活動できるようにする。また、掲示板や作成したものの掲示方法を工夫することで、自分の活動や考えを広げたり、深めたりできるようになるだろう。

理科では、昨年度に引き続き事象との出会いの充実や関連する既習事項や生活経験の振り返りを行い、根拠のある予想を一人一人がもつことのできるようにする。また、学級全体の予想を可視化できるよう、思考ツールやホワイトボード、タブレットの活用を行っていく。

（４）実験方法の妥当性を考える場面の設定

実験方法を１からすべて考えることが難しい児童もいるため、段階を踏んで考えられるようにしたい。まず、学習問題や予想・仮説を振り返り、自分は何を調べたいのかを改めて言語化させる。次に、簡単な方法を全体で検討し、その結果の見通しをもたせる。そして、これまでに似た実験をしている場合はその時の実験方法を振り返ったり、必要そうな道具に触れさせたりして、具体的な方法を考えられるようにしていく。また、特に高学年では、条件制御の考え方にふれ、自分の考えた実験方法で本当に調べたいことのみがわかるのかを考えられるように、変える条件と変えない条件を表にまとめるなどの工夫をする。

* 前年度の研究成果を生かした導入の工夫

- ①生活経験から派生した、多くのもの、具体物にじっくり触れ合う時間と環境を確保する。
- ②友達の道具に出会ったり比較したりする場の工夫をする。
- ③遊びの中でうまくいかないことから、その原因を考える中で学習問題につなげる。
- ④既習した内容を丁寧に振り返りながら図などを使って視覚的にもわかりやすく比較をし、共通点や差異点から問題を見出す。
- ⑤単元を通した大きな学習問題につながる教材の選定。
- ⑥生活経験や既習事項と相反する現象に出会わせる。

* 前年度の研究成果を生かした学習問題のつくり方

- ①キーワードを出し、それらを使って文章を作る。
- ②書き出しや定型文を与え、それに沿って作る。
- ③一人一人（または班ごと）が自由に考えたものを発表し、どれがより妥当か（学習問題としての価値が高いか）を全体で検討し決める。

7 仮説検証の方法

（１）児童の実態調査

アンケート調査を５月とプレ公開の学習終了後に実施し、その数値の変容を見取る。特に意欲的に活動していたか、主体的に活動していたかの内面的な部分を評価する。

（２）児童の姿からの分析

手立てによって児童がどのように活動していたかどうかを活動の様子から見取り、評価する。

8 研究の進め方

（１）研究組織

研究推進委員会

◎研究主任 ○副主任

校長 教頭 教務主任

- １、２年生：低学年ブロック ３、４年生：中学年ブロック ５、６年生：高学年ブロック
６組はそれぞれの児童の学年に応じて各ブロックに所属する。

(2) 年間スケジュール

三校合同研究協議会 10月23日 各学年1名実施

校内研究授業 1、2学期中 上記以外の担任

	研究予定	行事等
4月	今年度の研究について（校内研究会）	始業式・入学式 学級懇談会
5月	提案授業・研究全体会（講師来校）	陸上記録会・運動会 6年セカンド
6月	指導案のひな形作成	授業参観
7月	指導案検討について	小中音楽会 保護者面談
8月	指導案検討 指導案作成	
9月	指導案作成	始業式
10月	23日 三校合同研究協議会	6年修学旅行
11月		4年セカンド
12月	19日 鷺沼小公開研究会	5年セカンド
1月		
2月	研究のまとめ・研究全体会（講師来校）	6送会



校内授業研

※3校合同と同じ指導案でやってもよい。昨年度の研究である、「事物・事象との出会い」「問題を見出す」の場面で1つ、本年度の研究である、「事物・事象と触れ合う」「予想・実験」の場面で1つ授業を行う。

(3) 研究授業・協議会の役割

授業記録	
カメラ	
講師案内	

司会	
講師案内	
記録	
お茶	
会場設営	

9 これまでの研究の経緯

～平成17年度

研究主題「生き生きと活動する子供の学びを育てる」

副主題「子供の活動を深める教師の支援のあり方」

本校の課題として、特に「考える力」を育てていく必要があるということが明確になった。そのために、自分の思いを表す力を育てていくことを今後の課題とした。

平成18～20年度

研究主題「生き生きと活動する子供の学びを育てる」

副主題「考える力を育てる表現活動の工夫」

これまでの取り組みによる考察をもとに、本副主題を設定し、表現力の向上を目指した実践を行った。

平成21～23年度

研究主題「生き生きと活動する子供の学びを育てる」

副主題「思考の深まりを促す表現力の育成」

学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、新しい単元開発に取り組んだ。それとともに、「思考力、表現力の育成」が重視されたことと今までの研究成果の活用とを考慮して、副主題を上記のように

変えた。

平成24～26年度

研究主題「生き生きと活動する子供の学びを育てる」

理科副主題「問いをもち、追究していく子の育成」

生活科副主題「思いや願いをもち、気付きが深まる子の育成」

24年度になり、主体的に子供が自らの思考を深めている姿を目指して授業の改善に取り組むことにした。自分で問題を解決していこうとする力に加え、力の付いてきた表現力に着目し、子供の主体的な学びの姿を具現化すべく、取り組みを続けた。

平成27年度～29年度

研究主題「生き生きと活動する子供の学びを育てる」

理科副主題「問いをもち、追究していく子の育成」

生活科副主題「思いや願いをもち、気付きの質を高めていく子の育成」

27年度からは、生活科では、対象とのかかわりを通して気付きを広め、深める子供が育っていることを踏まえ、気付きの質をさらに高めていくことに取り組んだ。理科では、子供の主体性のさらなる育成に向けて、副主題は変えずに研究を続けた。

平成30年度～令和2年度

研究主題「生き生きと活動する子供の学びを育てる」

理科副主題「対話を通し、追究していく子の育成」

生活科副主題「対話を通し、気付きの質を高めていく子の育成」

30年度からは、指導要領の改訂を受け、「対話」に重点を置いた研究に取り組むこととした。対話とは、友達との対話に限らず、自然の事物との対話や、自分自身との内省的な対話も含んでいる。これらを生かした授業を構想し、子供の主体性を高めていくことを目指している。

令和3年度～令和5年度

研究主題「生き生きと活動する子供の学びを育てる」

理科副主題「対話を通し、追究していく子の育成」

生活科副主題「対話を通し、気付きの質を高めていく子の育成」

令和3年度からは、「対話」と「振り返り」に重点を置いた研究に取り組むこととした。対話の研究を継続していくことで、より子供たちの主体性を高めていくこと、振り返りを行うことで、新学習指導要領に示された「理科の見方・考え方」を養うことを目指している。

令和6年度～

研究主題「主体的に学び続ける子供の育成」

理科副主題「自ら問いをもち、試行錯誤しながら探究できる授業づくり」

生活科副主題「自ら思いや願いをもち、意欲的に学習できる授業づくり」

令和6年度からは研究主題を改め、「主体的」に「学び続ける」ことに重点を置いた研究に取り組むこととした。学習活動、問題解決の過程に焦点を当て、1年目は導入の充実を図り、児童が関心をもち、自分事として見通しをもって学習に取り組むことができる授業づくりを行った。